

JWCS通信

2025年10月発行
通巻
106号
www.jwcs.org

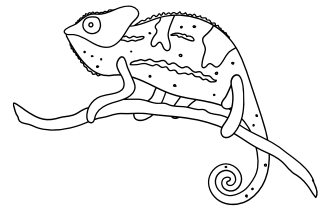
野生生物保全論研究会

野生動物との距離を考える

ワイルドライフカレッジ2025-2026の夏講座のテーマである「野生動物との距離」のうち、アニマルカフェの問題を講師の並木美砂子が整理しました。

エキゾチックアニマルカフェをとりまく諸問題の整理

並木 美砂子（JWCS代表理事）



1 バイオマスからみたヒトと動物

現在の全世界の哺乳類の構成をバイオマスで比較すると、最も多いのは家畜類（ウマやラクダ、イヌとネコ含む）で60%、ヒトは34%、野生の哺乳類はわずか4%であり、「ヒト」という哺乳類一種類のための食糧に供される哺乳類が圧倒的に多い。鳥類では、野生の鳥類は29%で、71%がニワトリやガチョウ、アヒルなどの家禽や水禽類である⁽¹⁾⁽²⁾。

また、伴侶動物（イヌやネコ）は私たちの非常に身近な動物ではあるものの、バイオマスでは家畜や家禽類に比較するとごくわずかである（図1）。

つまり、生態ピラミッドの頂点にいる肉食野生動物の量はヒトの量をはるかに下回っており、栄養系としてみれば、地球上には肉食野生動物（高次消費者）を支えている動物の量より、ヒトを支えている家畜類の量が圧倒的に多いことがわかる。ヒトの生活空間の加速度的な拡大と環境変化に伴い、当然、肉食野生動物がその家畜類を食料として利用する機会も増えていく。よって、私たちが身近であると「感じている」伴侶動物への精神的な距離の近さのみを出発点として、動物とヒトの距離問題を考えることには、自己中心的な問題があり、危険が伴うと考えられる。そのことに注意を払いつつ、次に、ヒトと伴侶動物の関係を少し歴史的にみてみよう。

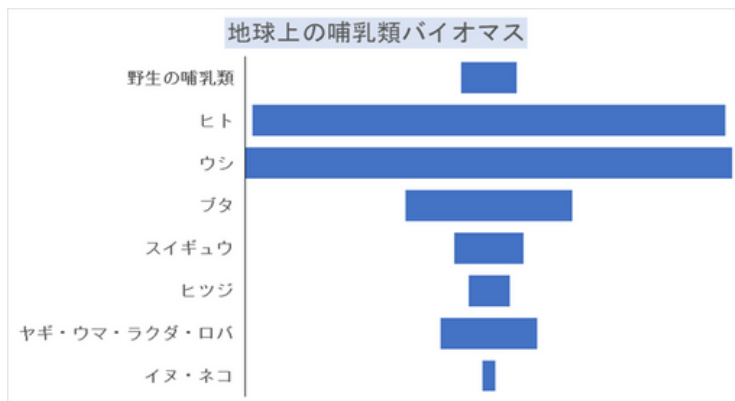


図1 地球上の哺乳類のバイオマス ((2)より筆者作製)

このように、私たちヒトの食糧として利用される家畜の量が野生の哺乳類を大きく上回っており、ヒトの精神面に大きな影響を与え続けている伴侶動物の量は家畜より非常に少ないのである。

2 野生動物の家畜化と伴侶動物の誕生（家畜化と馴化）

ここでは、まず、ヒトと動物の距離について、接近・接触がもたらす事から考えてみよう。

接近によって、ヒトはその動物の匂いがわかり、小さな声や足音もわかり、詳細な姿を観察できる。接触は、加えて「触覚」が加わるとともに、匂いはいっそう明確になる。ただ、接近・接触が可能になるには、馴化tamedという段階を経ることが必要で、それは、動物の側がヒトに管理されることを受け入れ、その環境に耐性を持ち、むしろヒトの存在を利用していくプロセスでもある。そして、ヒトは、利用目的

となる形質を累代飼育において保存していく努力を続け、その先に家畜化domesticationが完成した。その管理プロセスで大事なことは、遺伝的な管理つまり去勢や淘汰などを積極的に行うことであるが、それには、「人による所有」つまり財産としてその動物たちの管理が受け継がれていくことが必要であり、英語で家畜をLivestock（生きている所有物）と呼ぶことはそれを如実にものがたっている。

多くの野生動物の種類の中から、明確な用途のもとに累代飼育をされる種類が選ばれ、やがて他の野生動物からの捕食などの脅威から守るため、放牧時の保護の必要から、イヌの助けを得ることとなった。イヌもヒト集団の中での自らの位置を受け入れ役割を果たすことで、かけがえのない伴侶動物としての地位も築いてきた。ヒトとの接近接触を受け入れたうえ、むしろその機会を求める存在となり、domesticationのなかでも特異的な位置を占めたと言える。すでに先史時代の墓の例（ヒトとともに葬られた）が示すように、ヒトにとってはなくてはならない存在であったことは明らかである。

しかも、このイヌのdomesticationはそれ以後のさまざまな伴侶動物の開発において大きな影響を及ぼした。つまり、いずれの動物にも「馴化された動物はいずれも『ヒトとの接近接触』を好むもしくは厭わない（だろう）」という人間中心的な錯覚を起こすことにもつながった。ネコを伴侶動物として飼ったことのある人ならおそらく誰もが経験しているであろうが、縄張りを持ち、好んでヒトから撫でられたり抱かれることはあまりなく、ネコにとっては、飼い主を含むヒトの存在は「利用できる環境の一部」なのである。ただし、この錯覚は、集団で暮らす我々「ヒトという動物」に備わる特性であるとも言えるだろう。とくに、動物との関りが精神的な安寧や知的な好奇心をもたらすようになった現代においては、この特性こそが、採食対象や忌避対象とは異なる「ヒト以外の生き物に特別な関心をもつ基盤」にもなっていると考えられるからだ。言い換えれば、ヒトの暮らしに役立つその役立ち方に、直接的な利用とは異なる、精神的な側面での有用性を含んだ利用形態が現れてきたのである。そして、この有用性に、「飼育」という行為や、接近接触がもたらす何らかの内的な満足や安寧、最近の言葉で言えば、ポジティブな感覚が含まれていくのである。

3 動物との距離の場合分け

それでは、現代における「ヒトと動物の距離」について、「接触」「非接触」の場面に焦点をあわせて利用目的での分類を試みよう。以下では、場面分類の基準をその利用目的におくこととする。

まず、教育を目的とした場面である。そのひとつに「動物介在教育」をあげられるが、ここでは多様な小型の哺乳類（カイウサギやモルモット）や鳥類（ニワトリやインコ類）、爬虫類（カメやヘビ）、カイクなどの虫類が使われ、基本的に接触や接近の状況を積極的につくり、その状況を受け入れるような種類や個体が選択される。望ましい介在教育のありかたについては様々な議論があるが、触覚や嗅覚も駆使し、行動観察などにより、生きている存在への配慮ある関わり方を体験することがめざされている⁽³⁾⁽⁴⁾。

教育目的の例のひとつとして動物園/水族館における「保全教育」があげられるが、形態や行動の特徴を環境条件と関連させて知らせるため、間近でよく観察できる場面が設定される。そこでは、係員の責任のもとで、飼育動物との接近や接触が図られ、動物がそれを受け入れられるよういずれも馴化トレーニングがなされ、動物福祉上の基準が適用される⁽⁵⁾。

また、現在のところイヌの場合が多いが（セラピーホースのように、ウマを利用することもある）、サービスドッグ（盲導犬や聴導犬がその例）、セラピードッグ（所有者とともにサポート対象者がいる場所を訪問して何らかの関りをもつ）、感情サポートドッグ（その存在そのものが所有者に安らぎを与える）という役割分類がなされている場合⁽⁶⁾には、いずれにおいても接近/接触が図られる。なお、サービスドッグと感情サポートドッグは基本的に飼い主がその犬と生活を共にし、セラピードッグは飼い主がその目的のために随行して役割を果たすため、飼い主が接近接触場面をコントロールし、動物福祉上の認定制度の導入が試みられている⁽⁷⁾。

さらに、多様な目的による野生動物の観察場面も含まれる。一部、保全教育目的とも関連するが、しつらえられた人工的環境ではなく、野生での実際の暮らしぶりを観察することを指し、バードウォッチングがその一例である。ここでは基本的に相手に気づかれないような距離をとるため、当然、非接触である。ただ、野外での生態観察の行為は、そこに暮らす動物から見れば、脅威として受け止められるため、一定の逃走距離を確保し、それが保てない場合に攻

撃的な行為をすることとなり、その意味での接触はありうる。このほか、地域ネコとの関わりや野生の傷病鳥獣保護の場面における接近接触など、目的とあわせた場合分けは数多くできる。

以上のように多様な場合分けができる中で、以下では、伴侶動物の利用や野生動物観察とは異なる「接近接触」が許されている場として、エキゾテックアニマルカフェ（以下、EACと呼ぶ）の問題をとりあげる。なぜなら、非常に多くの希少性の高い野生動物が、日本に特異的に広がるEACで展示や販売がなされているからである。

4 EACの定義と範囲

以下では、保護犬猫カフェ（新しい飼い主とのマッチングを試みるための施設）は含まず、エキゾと呼ばれるような、イヌやネコ以外の哺乳類や飼育鳥以外の鳥、そして爬虫類などと接することのできる有料の施設をさすこととする。

4-1 アジアと日本のEACの数

アジアの10地域を対象に、2019年8月から10月、Googleを使用して「アニマルカフェ」、「ペットカフェ」等で検索したところ、日本は圧倒的にその数が多いことが示された⁽⁸⁾。

4-2 日本のEACの特徴

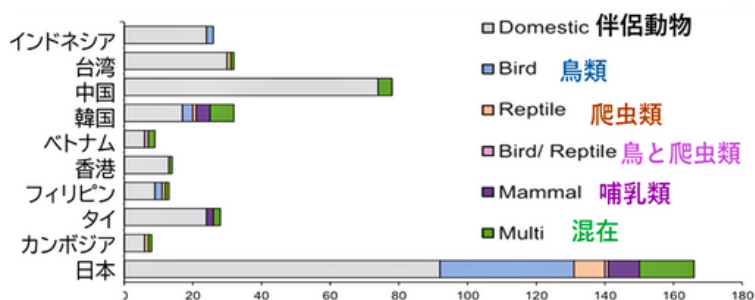


図2 世界の主なアニマルカフェの数と種類 2019年調査

また、2019年のSigaudらのインターネット上での調査報告⁽⁹⁾によると、日本には少なくとも142施設存在し、その地域的分布では、北海道から沖縄まで、1施設以上ある都道府県は30で、とくに、東京には44カ所、次いで大阪に24カ所、名古屋に8カ所、そして京都に5カ所存在するなど、大都市に集中していることが明らかとなった。

また、EACで展示や販売されている動物の種類をその店舗の名前から類推すると、哺乳類では、ウサギ・ハムスター・チンチラ・モモンガ・リス・ミーアキャット・ハリネズミ・フェネック・カワウソ・フェレット・マイクロブタ

（ミニブタ）など、鳥類では、小鳥（種類不明）・フクロウ類・タカ類・ペンギン類、爬虫類では、爬虫類（総称）・カメ・ヘビ、両生類では、カエル、そのほか金魚、そして昆虫がカフェ動物となっており、アクアリウムという総称になっている店舗もあるという。そして、最も数が多かった分類群は鳥類（鳥類全体では62%でフクロウが40%）、続いて爬虫類（21%）、哺乳類（15%）、両生類（2%）となり、餌を与えることができる、触れるなどの接触ができることに加え、販売目的の個体が含まれていた。

さらに、絶滅危惧種に属する52種403個体が確認され、その過半数（60%）はCITESに指定された種であると報告されている（附属書I：53個体、9種；附属書II：2,482個体、235種；附属書III：16個体、6種）。しかも、その中には絶滅危惧種（EN）のスダスローロリスが含まれていたことから、おそらくこれらの個体は違法に日本に持ち込まれたものであろうと推察されている。

4-3 日本のEAC利用者の特徴

利用者数についてのデータはないが、WWF-Jの15-75歳1000人へのインターネットアンケート⁽¹⁰⁾「EAに触れたいと思うかどうか」によると、「そう思う・やや思う」の回答者割合は、10代では63%で、年代が上がるにつれて減っていく（70代以上では13%）こと、そして、「実際に飼ってみたい」の割合も10代では39%で、年代があがるにつれて減っていくことが示された。そして、EA飼育のリスクについての情報（人獣共通感染症問題や絶滅危惧種が含まれている問題など）を知ると、飼育希望の割合も接触希望の割合も全体として減少するものの、規制強化への賛成割合が10代20代では約45%であり、50代以上の約80%の賛成割合に比較するとかなり低い。つまりリスクを承知で、エキゾテックアニマルへの接触要望が高い傾向がみられた。

4-4 EAC拡大の背景

1998年に台湾に初めて登場したネコカフェの人気の影響から、2004年に日本初のネコカフェがオープンしたとされ、その背景に癒しブームがあったこと、その癒しのための消費対象としてEACが展開したとされる⁽¹¹⁾。ただし、日本ではもともと保護猫や保護犬を飼育して新たな飼い主との出会いの場を設ける活動は行われてきており、ネコカフェはとくに室内でゆっくり過ごしながらマッチングのための貴重な場として定着はしていた。筆者の訪問経験と運営者へ

のインタビュー（2023年5月、未発表）情報によれば、「飼い主が現れるまで飼育をし続けるためのスタッフ雇用や飼育環境維持のための経済的基盤が必要であり、訪問客を増やし利用料を増加させるため、他の珍しい動物たちと触れ合える場を用意した」という経緯と背景があるとも考えられる。そして、通常は個人が飼育するネコを、自分が飼わずともその場を訪れるだけで癒しを得られる消費行動が定着したことが、経営者にとっては事業展開の基盤となり、多様な動物を店舗で眺め、餌やりや接触も可能な新たな消費活動の掘り起こしが始まったのだと考えられる。

本来、飼育する行為には、命への責任を負うための場や餌、飼育ツール含む消費財を整え、自分の時間を費やし、その過程で喜びを得られるものであったが、その一時的な『癒しを購入』するための手軽な場として、EACが増加の一途をたどったのであろう。ここでは、癒しブームそのものの背景については述べないが、癒しという精神的なリカバリーが、東日本大震災をはじめとした社会不安や孤独の埋め合わせに必要で、その埋め合わせにアニマルカフェが一役買っているのではないかと議論もみられる⁽¹²⁾。

4-5 バードカフェの実態

このように、ネコカフェをルーツとし、多様な種類の動物を扱うEACの中でも、バードカフェ、とくにフクロウカフェは日本に特異的に存在するものである⁽¹³⁾ ⁽¹⁴⁾。Panterら（2023）⁽¹⁵⁾によるCITESの記録に基づいた調査の結果、1975年から2020年の間に、少なくとも272種188,149の猛禽類が取引され、このうち、最低86種の夜行性猛禽類の取引があり、種数は時間の経過とともに増加した。そのなかで、日本がフクロウ類の世界最大の輸入国であり、これはペットとしても販売され、お金で「カワイイ」を買うための「バードカフェ」が原因であろうとの指摘がなされている。

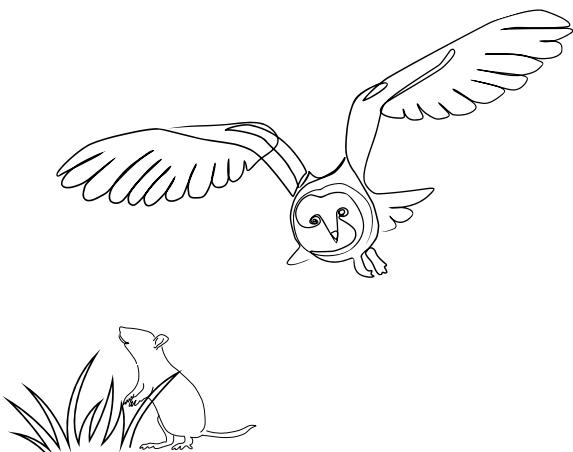


表1 猛禽類とフクロウ類の国別輸入個体数（トップ5）⁽¹⁵⁾

Importer (WC)		Imported individuals (WC)
RAPTORS		
猛禽	Japan	4472
	Portugal	1024
	Spain	875
	The Netherlands	623
	Saudi Arabia	459
Total		9756
OWLS		
フクロウ	Japan	12147
	Spain	271
	Canada	100
	The Netherlands	77
	South Africa	61
Total		12932

さかのぼる事2001年には、インドネシアの多くの鳥市場で数百羽が売れるのみであったのに対し、2015年の調査では、3か所の鳥市場で2万羽の販売が確認されその多くが違法販売であることが摘発された⁽¹⁶⁾。マレー語でフクロウはブルンハントゥと呼ばれるが、現在、ブルンハリーポッター、もしくはハリーポッター鳥と呼ばれているという⁽¹⁷⁾。なお、この調査で紹介されているフクロウ類の画像にはアナホリフクロウの幼鳥が数羽映っており、おそらく樹洞の巣から採ってきたものと推察されるが、世話をされなければ衰弱してそのまま死を迎える運命にあることは容易に予想される。しかし2025年現在、この種はCITES附属書には掲載されておらず、輸出は可能な状況である。

また、東京の「フクロウ専門店」（フクロウカフェ）のサイト⁽¹⁸⁾によれば、ここでは来場者が直接触れたり、生体と餌を購入することができ、2025年9月現在、オオフクロウ（*Strix leptogrammica*）は1羽30万円、オオスズメフクロウ（*Taenioglaux cuculoides*）は1羽25万円の値がつけられている。このことから、高額で販売され続ける供給元には、これら東南アジアの野生捕獲個体が含まれ、フクロウカフェが販売を続ける限り、捕獲圧は高まり続けることが容易に予想できる。このサイトの写真にあるように、夜行性の動物にとって休息の時間である明るい光のもとで、展示され、触れられることには大きな問題もある上、帽子をかぶらせる演出は、擬人化させた「飾り物」以外のなものでもない。



図3 日本国内のフクロウカフェのサイトより
(夜行性の鳥類に明るい場所でふれあいや展示がなされている)
https://happy-t.co.jp/shopcms/info_4692.html#top

4-5 EACが利用者に与える影響

実際EAC利用が拡大する背景とは何であろうか。Sharneら⁽¹⁹⁾によると、EACは、利用者に対して希少性への関心を呼び起こし、普段の生活では接することのできない希少動物への物理的接触や給餌体験を通して、その動物の所有欲を満たす場であると定義される。実際、餌や飼育環境整備に必要な道具類を含め、動物の購入先として利便性に富む場となっている。つまり、EACは自然との「特殊なつながり」を体感させることにより、所有欲を刺激し、餌や飼育に伴う物品購入を永続的に継続させる機能を持っており、さらなる野生動物捕獲を含む取引を呼び起こしているのである。

希少動物へのアクセスがお金を払えば簡単に可能な状況がそこにあるのだが、アクセスとは、触れ、給餌を与え、普段とは異なる特別な環境に身を置くことを含む。そうした個人的で得難い体験という消費活動が、実際には後に述べるように、いっそう「野生動物取引」に拍車をかけることになる。

いっぽうで、爬虫類や両生類に触れる機会は、まったく新しい体験を参加者にもたらし、集中力を高め、その一瞬の体験が、不安やPTSDを抱える人々にとっては有益な時間となるという主張もある⁽²⁰⁾。また、野生の動物に対する「有意義なケア」をより適切に促進するための新しい洞察が得られる可能性があること、つまり、人間とは異なる野生動物への規範的な親近感としての「ケア」の促進は、自然の「所有欲求」ではなく「管理関係」へと導く助けとなり得るのではないかと、という主張もみられる⁽²¹⁾。しかし、親近感を野生の世界にもつこ

とは、擬人的な親近感ではない「新しい親近感への変化」を意味し、そこには自らの消費行動を理性的に制御することが含まれ、いわゆる伴侶動物との関係の経験をもとにそれを敷衍させていくとしたなら非常に問題である。この消費行動には違法な野生生物取引が含まれるリスクを常に負うからだ。次にその点をみてみよう。

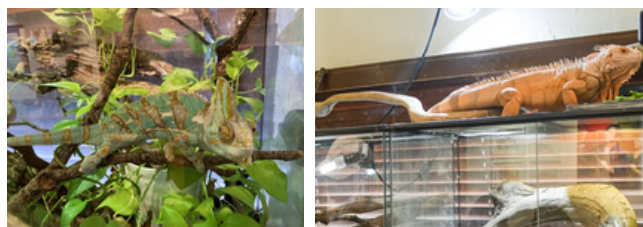


図4 筆者が訪れた爬虫類専門のEAC（2023年5月訪問）

5 違法な野生生物取引につながるEACとマーケット（インドホシガメを例として）

国連の薬物犯罪事務所からの情報やWWFの情報をもとに、違法な野生生物取引の主なマーケットについて、Panterら（2023）⁽¹⁵⁾ は次の5つを挙げている。エキゾチックペット、衣類（毛皮や革製品）、装飾品、伝統的食材、伝統薬である。エキゾチックペットとは、まさにEACの動物たちのことである。その中で、CITES附属書Ⅰ表のインドホシガメの場合を例にとると、仲介業者の介在が値をつりあげていることがわかる⁽¹⁶⁾。すなわち、本種の生息地をよく知っている「調達者」が、地元の取りまとめ業者を通じて、国内での仲介業者の手に渡り、国外市場へと流れていくが、最初の調達者（すなわち実際に捕獲する人）は1匹あたり5ドルであるのに対し、国内から国外へと渡るときには50ドルと10倍となると報告されている⁽²²⁾。

末端価格ではいくらで販売されているのかについて、実は、日本国内の爬虫類販売サイトでは、「インドホシガメを含むリクガメ類11種がCITES附属書Ⅰ掲載種になったことにより入手ができなくなるという情報」をもとに、現在の個体の販売価格を「7cmほどのベビーだと3万円前後、20cm前後の大人だと10万円ほど⁽²³⁾ や、甲長12.5cmで44万円⁽²⁴⁾と紹介されている。しかも、これらはEAC店舗をもたないネット販売であり、国外へ渡る際には50ドル（7500円程度）という値であったことからすると、あまりに高額である。EACで甲羅の美しいカメとのふれあいを体験した訪問客に、より希少なカメ類への注意を向けて宣伝し、購入欲を煽っているとも推察できる。

さらに危惧されるのは、違法な野生生物取引へ

の規制が、野生の近縁種の販売に拍車をかけているという点である⁽²⁵⁾。この分析は、Yahoo!オークション(<https://auctions.yahoo.co.jp/>)の11年間(禁止前9年間と禁止後2年間)のデータセットを使用したものであるが、たとえば、トウキョウサンショウウオの規制直前価格が60ドル近くであり、クロサンショウウオ価格はそれまで20ドル前後であったが規制後2年間で60ドルを超えていると紹介されている。

このように、規制がかかることにより、規制対象種類の価格に近い値が近縁種の価格を上げ、その結果、乱獲につながるであろうことは容易に予想可能である。よって、希少な動物の所有欲と、その動物を飼育するうえでの餌や飼育環境整備に伴うツールやグッズの商品販売がセットとなり、近縁種の値のつりあげが起きている可能性がある現在、飼育可能な種の指定(いわゆるポジティブリスト)整備は急務であろう。ただし、「売れない」となれば、売る目的の個体の違法な野生放出を引き起こすかもしれない。

このように、EAC問題は、珍しい動物の直接的活用場面としての問題と、そうした動物への興味関心の持ち方次第では、近縁種含め野生動物の捕獲圧を強める可能性が大きい。接近接触という利用形態が「その場面でもたらず問題」と、その利用形態を越えて起こる可能性のある「野生動物保全上の問題」につながる可能性が大きいと考えられる。

○事務局より

JWCSは、10月から「ペット・園芸用輸入動植物の管理に関するポジティブリスト法制化の研究」を開始します(自然保護助成基金の助成)。このアニマルカフェの問題も含め、研究の成果は2026年9月に報告書とオンラインシンポジウムで公表します。

参考文献

- (1) <https://ourworldindata.org/wild-mammals-birds-biomass>
- (2) <https://journals.plos.org/plosone/article?id=10.1371/journal.pone.0291791>
- (3) <https://pedagogikaspoleczna.com/wp-content/uploads/2024/07/PS-1-2024-175-195.pdf>
- (4) Guberman, A., Axelrad-Levy, T., Rauscher, S. A., & Motro, M. (2024) Interactions with Animals in an Educational Setting: Children's Perspectives. *Social Pedagogy/Pedagogika Społeczna*, 91(1).
- (5) de Mori, B., Ferrante, L., Florio, D., Macchi, E., Pollastri, I., & Normando, S. (2019) A protocol for the ethical assessment of wild animal–visitor interactions (AVIP) evaluating animal welfare, education, and conservation outcomes. *Animals*, 9(8), 487.
- (6) McMichael, M. A., & Singletary, M. (2021) Assistance, service, emotional support, and therapy dogs. *Veterinary Clinics: Small Animal Practice*, 51(4), 961-973.
- (7) Defining Terms Used for Animals Working in Support Roles for People with Support Needs by Tiffani J. Howell, *Animals* 2022, 12(15)
- (8) McMillan, S. E., Dingle, C., Allcock, J. A., & Bonebrake, T. C. (2021) Exotic animal cafes are increasingly home to threatened biodiversity. *Conservation Letters*, 14(1), e12760.
- (9) Sigaud, M., Kitade, T., & Sarabian, C. (2023) Exotic animal cafés in Japan: A new fashion with potential implications for biodiversity, global health, and animal welfare. *Conservation Science and Practice*, 5(2), e12867.
- (10) WWF_WP_ol_revised5. <https://www.wwf.or.jp/activities/data/20210304wildlife01.pdf>
- (11) Robinson, A. S. (2019). Finding healing through animal companionship in Japanese animal cafés. *Medical humanities*, 45(2), 190-198
- (12) Plourde, L. (2014) Cat cafés, affective labor, and the healing boom in Japan. *Japanese Studies*, 34(2), 115-133.) (<https://conbio.onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/conl.13077>)
- (13) McMillan, S. E., Dingle, C., Allcock, J. A., & Bonebrake, T. C. (2021). Exotic animal cafes are increasingly home to threatened biodiversity. *Conservation Letters*, 14(1), e12760. <https://conbio.onlinelibrary.wiley.com/doi/pdfdirect/10.1111/conl.12760>
- (14) Sigaud, M., Kitade, T., & Sarabian, C. (2023). Exotic animal cafés in Japan: A new fashion with potential implications for biodiversity, global health, and animal welfare. *Conservation Science and Practice*, 5(2), e12867.)
- (15) Panter, C. T., Jones, G. C., & White, R. L. (2023). Trends in the global trade of live CITES-listed raptors: Trade volumes, spatiotemporal dynamics and conservation implications. *Biological Conservation*, 284.
- (16) <https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/15/b/092800038/>
- (17) Nijman, V., & Nekaris, K. A. I. (2017). The Harry Potter effect: The rise in trade of owls as pets in Java and Bali, Indonesia. *Global ecology and conservation*, 11, 84-94.
- (18) <https://akiba2960.com/jp/asianbarredowlet>
- (19) Sharne E. McMillan et.al.,(2020) Exotic animal cafes are increasingly home to threatened biodiversity.
- (20) <https://handsonexotics.com/exotic-therapy-animals-benefits>
- (21) McMillan, S. E., Dingle, C., Allcock, J. A., & Bonebrake, T. C. (2021). Exotic animal cafes are increasingly home to threatened biodiversity. *Conservation Letters*, 14(1), e12760.
- (22) D'Cruze, N., Singh, B., Morrison, T., Schmidt-Burbach, J., Macdonald, D. W., & Mookerjee, A. (2015). A star attraction: The illegal trade in Indian Star Tortoises. *Nature Conservation*, 13, 1-19.
- (23) <https://globalanimals.jp/animals/tortoise/4319/>
- (24) <https://woriver.com/9048/>
- (25) (McMillan, S. E., Dingle, C., Allcock, J. A., & Bonebrake, T. C. (2021). Exotic animal cafes are increasingly home to threatened biodiversity. *Conservation Letters*, 14(1), e12760. (<https://conbio.onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1111/conl.13077>))